

「あること」に向かって

竹口浩司

近ごろわたしは「生きる」とか「生きていく」という言葉をあまり使いたくないと思っている。生存学という学問を知ってからというもの、「生きて在る」という言葉を（やや聞きなれないかもしれないが）使うようにしている。「生きる」や「生きていく」という言葉には、「生きよう」とする本人の意志や主体性といったものがどこか言外に刷り込まれ、たとえばいわゆる植物状態の人や主体性を持たない（持たない）人たちを「生」からはじき出し、排除してしまう響きを聞き取ってしまうのだ。あるいはこの私自身にしても、今のところそんなに力いっぱい生きていくわけではないので、「生きていかなきゃ」と周りから強いられれば息苦しさを感じるし、生きにくくもなる。それよりも、人はただそこに在ればいい、人が生きて在ることがそのまま尊いのだと認め合える世の中を望んでいる。

では極論、人は生きてさえいれば何をしてもいいのか、たとえば犯罪をおかし、他人なら殺しても構わないのか、と問われれば、それは違うとも言うし、そうだとする。たとえば今の世の中においては、自身の意志によろうとそうでなかろうと法をおかし、人を傷つけば何らかの裁きを受けることになるだろう（ただし法的に「責任」を問われないケースもあり、その仕組みについてここで直截的に言及することはしないが、当然ながらこれ以降間接的に触れることになる）。しかし、あらゆる人が本当の意味で人の生、人が生きて在ることを肯定することのできる世の中が成立するのであれば、そこにはもはや法も道徳も必要ないのかもしれない。あるいは中上健次が描き出した〈路地〉という可能世界がある。「生きる事と死ぬ事がよじれ合ってたてるふつつつという音が耳に聞える」ようなそこには産婆のオリウノオバがいて、オバはもはや「人の物を盗んではいけない、人を殺めてもいけない、殺傷してもいけない、という道徳はあたうる限りない」し、「何をやってもよい、そこにおまえが在るだけでよい」といつも思ったし、（僧侶の）礼如さんと暮らし続けて仏につかえる道は何もかもそうだったと肯い得心することだと」思うと言う。

さらにあるいは、人の心性や社会の様態に関わらず、主体性について考えつくせば辿りつくところもあるだろう。エマニュエル・レヴィナスは主体性とは「他者のために／他者の身代わりとして」罪を贖うことによって基礎付けられていると書いているようだし、またこうも書いている。「主体の主体性は有責性あるいは被審問性であり、それは頬を打つものに頬を差し出す全面的な曝露というかたちをとることになる」。レヴィナスにとって「他者」とは死者をも含み、生者たる主体とはそれとの絶対的な隔たりの彼方、のっぴきならない「よじ

れ合い」(中上)の果てに立ち上がってくるのだろう。いまだ私にはレヴィナスが言わんとしていることはまるで理解できないに等しいが、次の言葉にも胸をつかまれる。「認識するとは暴露し、命名し、それによって分類することである。パロールは一つの顔に向けて発される。認識とは対象をつかむことである。所有するとは存在を傷つけぬようにしながらその自立性を否定することである。所有は被所有物を否定しつつ生きながらえさせる。だが、顔は侵犯不能である。人間の身体のうちでもっとも裸な器官である眼は、絶対的に無防備でありながら、所有されることに対して絶対的な抵抗を示す。この絶対的抵抗のなかに、殺害者を誘惑するもの—絶対的否定への誘惑—が読みとられる。他者とは殺害の誘惑をかき立てられる唯一の存在である。殺したい、しかし殺すことができない。これが顔のヴィジョンそのものを構成する。顔を見ること、それはすでに「汝殺すなかれ」の戒律に従うことである。そして「汝殺すなかれ」に従うことは「社会正義」の何たるかを理解することである。そして不可視のものたる神から私が聴きうることのすべては、このただ一つの同じ声を経由して私のもとに届いたはずなのである。」

2012年に「糸の先へ いのちを紡ぐ手、布に染まる世界」という展覧会を企画したことをきっかけに、存在(感)というものについて考え始めるようになった(図録エッセイは同じ『千年の愉楽』の別の引用から始めている)。たとえば「あの物体は存在感に溢れている」と言うとき、私たちはその物質の量塊性を意識する。存在感の有る／無しは、その対象が大きい／小さい、重い／軽い、厚い／薄いという様態に多分に関わり、それを見る(わたし)とは関わることなしに、いや(わたし)などいなくても、空間を歴然と占有し、視覚的に認識される何かをイメージする。しかし現実には(わたし)との関係の中ではじめて感受されるものや立ち上がってくるものがあるし、いわゆる「存在感」が薄かったり無かったりしてもちろんと在るものがある。布や繊維の魅力はそういうところに深く根ざしているし、それらは私たちに「在る」ということについて生々しく教えてくれる。たとえば、とある作家が織った天女の羽衣のように薄く透ける布は、視覚的に見れば存在感が無いに等しいのだけれど、それがふわりとわたしの手に舞いおりた瞬間にその存在を一挙に(暖かさとして)伝えてくる、といったことがある。

しかし先日のこと。とある大学の講義でこの話をしたときに、ひとりの大学生が疑問をぶつけてきてくれた。「先生(=わたしのこと)は、(スライドで写した)薄く透ける布のことを「存在感がない」とおっしゃいましたが、わたしにはとても存在感のあるもののように見えました。実物を見ればおそらくわたしは震え、その場に立ちすくんでしまうと思います」と。ハッとさせられた。わたしこそが「見る」という営みを限定的にしか捉えていない張本人なのかもしれない。この大学生は(スライドで見ているだけとはいえ、あるいはだからこそ)対象を真の意味で「見て」いる。レヴィナスが顔を「見る」のとそう遠くない態度で布を見ようとしているのであり、「見る」という営みの中に対象と(わたし)との「よじれ合う」

ような関わりを持とうとしている。いや、実はレヴィナスとその大学生が別格なのではない。「見る」とはそもそもそういう生を賭けた営みであり、その交渉のなかから〈わたし〉という主体性が都度立ち上がってくるのだ。「見る」ということのその当たり前の迫真性を回復し、存在について、人が生きて在ることについて、あらためて思考／試行する場をつくりたいと思った。

なぜ「人が生きて在る」とは言い慣れず、聞き慣れないのか。そもそも「生在」という言葉はないが、「生存」という言葉はあるし、「生き存（ながら）える」とも言う。この違いは何なのか。

「生存」という言葉はしかし「あの人はまだ生存している」とか「生存確認」というふうに、人が生と死の狭間にある状態に用いられることが多いようだ。いやむしろ、生よりも死の方に足を踏み入れつつあり、それでもなんとか生を保っているという状態、と形容する方がより近いかもしれない。つまり心臓は動いているし息もしているが、その生は通常の「生」とはすこし（かなり？）異なるものとして扱われているのではないだろうか。語弊があることを承知であえて言えば、いのちがあるにも関わらず、生き物としてよりも物質に近いものとして割り振られている状態。たとえば「いのち」と（従来のな）「生」とがイコールで結び付けられていないことは、「いる／ある」の言葉の使い分けからも分かる。「机がある」とは言うが「人がある」とは通常言わないし、「人がいる」とは言うが「机がいる」とは言わない。とすれば、一見「ある」とはいのちを持たない物質に対して使われ、「いる」とはいのちを持つものに対して使われる、と説明できそうだが、しかし「花がある」とは言うが「花がいる」とは言わない。つまり、単純にいのちの「有る／無し」で「いる／ある」が使い分けられているのではなく、いのちを持つもののなかでも主体的に空間を移動できるものだけが「いる」の対象となり、「生」の保持者（あるいは実践者）と認められる。子どもの頃誰もが覚えた「手のひらに太陽を」という歌があるが、ここでも「生きている」「ぼくら」の「友だち」はミミズ、オケラ、アメンボ、トンボ、カエル、ミツバチ、スズメ、イナゴ、カゲロウであり、花や木のいのちが「ぼくら」の仲間入りをすることはない。

次に「存在」という言葉について。「生存」の「存」と「生きて在る」の「在」を組み合わせた言葉とひとまず言うこともできるだろうか。これだと「人が存在する」とも「机が存在する」とも言う。神も存在するし、心も存在するし、宇宙も存在する。だから問題は「いのち」のことではない。とはいえ多分に哲学的なこの言葉（概念）を正面から問うことはわたしの手に負えるところではないし、ここですべきことでもないだろうから、素朴な疑問を示すだけにする。それは、古代ギリシア語の *eon* や *ousia*、ラテン語の *esse*、ドイツ語の *Sein*、フランス語の *être*、英語の *being* がどうして日本語の「存在」という言葉になったのか、ということ。つまり「在る」にどうして「存える（ながらえる）」という時間を内包する言葉

が組み合わされるに至ったのか。さらに「存在する」は英語で **exist** とも言うが、これはラテン語の「外へ (ex) 踏み出す (sist)」を語源とし、時間ではなく空間を内包しているから先ほどの「いる／ある」の問題とつながってまた興味深い。

こういった言葉の成り立ちについてはすでに常識的に言われていることがあるような気がするし、単なる不勉強なわたしの見当違いを吐露するようで恥ずかしくもあるのだが、しかし「存在」という言葉には（そして同じく「生存」という言葉にも）あるひとつの揺るぎない時間概念が土台になっているように思えてならない。それが、時間とはつねに過去-現在-未来と直線的に流れ去り、その時間の流れの突端に位置する（現在（現に在ること））は未来を侵食しつづけ、過去へと移送されつづけるという概念。だからこそ、現実の時間の流れを超越し、あるいは現実の時間の流れに抗って「在ること」を「存える」ための言葉が必要となり、現実には朽ちるべきところに朽ちることのない「存在」が誕生する。たしかに時間は流れ去っているように感じられるし、それ以外の時間を考えることは難しい。しかし同時にわたしは、現実にはわたしたちが生きて在る時間というのは必ずしも流れ去らず、ぽっかりと浮かんでいたり漂っていたり、わたしたちが時間の流れを一足飛びにワープしたりすることもあると実感しつつあるのだ。（わたし）の外部で流れ去る時間ではなく（わたし）の内部で伸び縮みする時間、さらに適切に言えば（わたし）の生とともにある時間のことを考えたいと思う。（インターネットの必ずしも信憑性のある記事とは言えないが、興味深いものを見つけた。そこには「(相対性理論をもとにすると) 現在・過去・未来は同じ時空間に広がっていて、それが散在している状態であり、私たちはある特定の時間 (=現在) にのみ存在しているのではなく、すべての時間に同時に存在しているのだ」と考える時空間理論があるのだと書かれていた。正直なところ理解は遠く及ばないが、感覚として近いものを感じている。)

生と親密な時間の在り方を 2013 年の「江上茂雄 風ノ影、絵ノ奥ノ光」展で考えるようになり、続く 2014 年の「とととと？ きおく×キオク＝」という展覧会では、時間の経過とともに忘れ去られるばかりではなくいっそう生々しく立ち上がってもくる記憶というものを巡って実験（的な展示）を試みた。生の捉えがたさを展示空間の中でいかに体現し、主体と他者との境界線が弛緩し、溶けだすような瞬間をいかに招来するかを考え抜いたつもりだが、「成功」と呼ぶには程遠かったように思う。ひとつにそれは、いまだ「(現代) 美術／展」という既存のカテゴリーから抜け切れていないことに起因する。同時に「美術」だからこそ生みだせるものがあり、それによって「美術／展」という場を新たに鍛え直さなければならないと思う。小説家の保坂和志はこんなことを書いている。「(保坂氏の小説『未明の闘争』にも登場する) 友達のアキちゃんは、分身や生まれ変わりのことばかり考えている。分身や生まれ変わりはあっても、いま私たちが使っている文章ではそれを捕らえられないだろう。と、これも（先の小説を）書いているうちに考えた。「捕らえる」という言葉がす

で、自分と対象という二分法に乗った考え方で、それは捕らえるのではなく、並走るとか、掠めるとか、踊るという感じだろう。分身・生まれ変わり・永劫回帰・主体の入れ替わり……というようなことは、人生の思いもかけないときに起こっていたのかもしれない。起こっていたのに、「起こらない」とか「起こってほしい」という否定的な先入観で生きていたために、それを踊れなかったのかもしれない。」 人の生において当たり前になっているような、ただ「或ること」として言うことしかできない出来事としての美術／展とはいかに可能か。〈わたし〉から隔たった他者として客体化され、分類され、所有され、消費されるのではなく、〈わたし〉に近くて深いなにかのままであること。その「他者」を〈わたし〉の一部として飲み込こんでしまうような、あるいは飲み込まざるをえないような出来事は、indivisualに分割された「わたし」ではなく、間主観性がしみわたった「わたしたち」という新たな〈わたし〉を立ち上げてくれるような気がしている。そしてそれこそが、これからの世の中を健やかに生き、笑いながら「踊る」ために必要な術なのではないだろうか。

「あること」は、コレクション展連続企画第3弾「特集：現代美術 “いま・ここ”を巡って」の関連企画として開催される。現代美術を当館コレクションから辿ることで、そこから抜け落ちてしまう（つまりモノとして収蔵しにくい）インスタレーションやパフォーマンスを拾い上げ、件の特集展示を補完したいというのがもともとの出発点であったが、いまや脱線逸脱紆余曲折極まりないものとなりつつある。それこそが生の曖昧さであり、のびきならないところであると言えればそれまでかもしれないが、三人それぞれの方法で「あること＝在る（という）こと／或ること」にアプローチしながらいっしょに一つの場をつくってほしいとリクエストされている作家たち（坂井存、坂崎隆一、三輪恭子）からすれば、たまったもんじゃないだろう。

そこで最後に、じつはこの展覧会の企画がクラムボンの「ある鼓動」という曲からインスパイアされて生まれたこともちゃんと告白しておこう。もちろん単なる語呂合わせではない。

*このテキストを書き終えてから気付いたのだが、当初「生きて在るを学ぶ」とあった生存学が「生きて存るを学ぶ」に統一されつつあるようだ。全くの門外漢の私が遠くから眺め、足元覚束なく考え、混乱しながら書きつつあるテキストなので、もし読んでくださった方はいろいろとご教示くださればありがたい。いずれ続きを書くか、最初から書き直したいと思う。